

富岡鐵齋の旅行記に就いて

小 高 根 太 郎

一

古來東洋の畫道に於いては、「萬卷の書を読み萬里の路を行く」ことが其の修業課程として一つの理想とせられてゐる。しかし事實上、此の理想を實踐した畫家は恐らく極めて稀である。富岡鐵齋は實に其の少數者の一人であつた。

讀書人、學者としての鐵齋は此處に述べる迄も無く著名であるが、旅行家としての彼も亦其の足跡全國に遍く、殆んど到らぬ限なかつたと稱するに足る。一般に安政六年の事と傳へられてゐる長崎旅行を始めとし、其後大小の旅行枚舉に暇あらぬ程であり、彼の書殘したる旅行記類は相當の部數に達して居る。其等は現在富岡家に保存せられあるが、鐵齋傳研究の上に極めて重要な資料であることは多言を要しない。今其等に就いて調査せる所を極概括的に報告し、且其等の中特に興味深く思はるるものを選んで公刊する事とした。なほ現在調査せる限りに於いては、維新以前に屬する旅行記類は

富岡鐵齋の旅行記に就いて

唯今富岡家には殘存せざるものの如く、或は當時旅行記の如きを作製せざりしか、或は作製したりとするも其後數次に互る轉居に際して紛失せるか處分せられしものならんと思はるるが、今日より之を思へば實に惜しむべきことである。維新以後の旅行に就いても、現在遺存せる記録以外にも尙大小の旅行を試みしなるべく容易に想像せられ得るが、併し此の記録類に依つて彼の全生涯に於て成したる其の旅行の全貌は縦、察し得べからずとするも、其の大體は彷彿するに足ると思はれる。右旅行記類の調査に關しては富岡益太郎氏の御好意を受けること厚かつた。此處に記して深甚の謝意を表する。

註 今日流布する鐵齋傳は一般に、其の長崎旅行を安政六年度の事と記してゐる。其の據る所は横川毅一郎氏が雑誌「中央美術」第百一、百二兩號に互つて發表せる「鐵齋翁生立ちの記」に在り、横川氏は其の記事の大體を鐵齋と交遊ありし谷上攝山氏が鐵齋より得し聞書に依りしものの如くである。併し此の長崎旅行の年次に關しては尙考ふべき所多く、大體に於いて前後の事情より判斷すれば安政六年説は妥當なるに似てゐるが、明治三十年に鐵齋が黒田天外に語り同三十二年天外の公にせる「名家歴訪録」中に掲載せられたる談話に依れば、鐵齋は其の二十八歳の頃、即

九

ち文久三年頃長崎に赴ける由にして、同地に一年程滞在、和宮御降嫁の頃京都に歸りしと云ふ。和宮御降嫁の事は然るに文久元年であり、故に此の談話記事は其の儘にしては信じ難いが、併し彼が長崎より持ち歸りし「瓊浦勝景圖」と題する一華人作製の畫帖に後年附したる跋文にも、「余亦文久年中西遊之次流寓於此（長崎）」云々と自記しあるを以て遽かに文久年間説も否定し得ない。なほ大正三年彼が七十九歳の時、其の蒐藏印を自ら鈴し、之に註解を加へたる印譜「文人多癖」中に、彼が長崎に於て之を得、日常好んで使用したる「鐵道人」朱文角印を載せ其の註に慶應年間長崎に寓する旨記載されてある。安政若しくは文久とは別に、慶應中にも同地に赴きし事實あるか、或は鐵齋の記憶の誤謬なるか、未だ何れなるかを知らぬが、此處に附記して後考を俟つ事とする。

二

以下、年代順に是等旅行記を分類し、其の題を掲げ、其の大體の體裁を述べ、其の記事内容を説明することとする。

明治五年（三十七歲）

薩遊漫記第一號（法量竪二四・二厘——八寸、幅一七厘——五寸六分。和紙九枚綴。表紙に「明治壬申五月、鐵齋生、薩遊漫記第一號」と記す。）

五月二十六日大阪より汽船にて鹿兒島へ向ふ。瀬戸内海、豊後水道、日向灘を経て同月三十日鹿兒島着。六月九日海路大隈國梶木浦に至る。翌十日國分八幡宮に謁し、夕刻西霧島村に至る。十一日霧島山に登り頂上を極め下山。十二日梶木浦より鹿兒島に歸る。記中、船上より遠望せる阿波、讃岐、伊豫、日向、薩摩等諸國沿岸風景、霧島山、霧島神宮、天逆鉾等の圖有り。^註

^註 薩遊漫記は第一號のみにして以下遺存せず。従つて其後に於ける彼の旅程を明かにし得ざるも、此の年九月發行の京都新聞第卅九號に「富岡鐵齋、地學講究或ハ古昔ノ忠臣義士ノ事跡ヲ搜索ノ爲歴遊スル所、春來既ニ千里ニ及ビ、其話ノ中

ニ備後三郎高德朝臣ノ櫻木ニ詩ヲ題セシ地ハ、美作國院庄ト云所ニテ津山城ヨリ一里半西也」云々とあり、同地方を歴遊したることを推察し得る。

明治七年（三十九歲）

北遊日記第一（法量竪二二厘——七寸二分五厘。幅一三・五厘——四寸四分五厘。半紙廿五枚綴。表紙に「明治七年甲戌六月、富岡鐵齋、北遊日記第一」とあり。）

六月下旬より十月上旬に至る日數凡百十日の大旅行にして、北海道、奥羽、關東の諸地方を歴遊せる記録である。鐵齋の旅行記中、記事の一等詳細を極めしは是にして、種々の意味に於いて興味深きもの存するが故に公刊することとした。詳細は其れに就いて見られたし。圖殆んどなし。^註

^註 鐵齋は、これより先、明治六年五月、北海道旅行を試むべく東京に至つたのであるが、湊川神社權禰宜に任命せらるる事となり、其の素志を遂げず、木曾街道を経て歸洛した（美術研究第六十五號所載、富岡鐵齋公私事歴録參照）。しかるに湊川神社の件は鐵齋の心に合はざること有りしに依つて之を辭し、此の年を以て豫ての志望を實現することとなつたのである。なほ鐵齋の北海道遊歴に就いては從來の傳記、或は明治十四年の事と記すものもあるも如何にや。現在富岡家には其の記録遺存せず、此の十四年説は遽に否定すべからずとするも、なほ確實なる旁證の存せざる限り、容易に信を措き難い。

北遊日記第二（小型洋紙雜記帳。表紙缺。法量竪一一厘——三寸六分。五厘、幅六・五厘——二寸一分五厘。紙數五十一。）

表紙を缺く故に其の題を詳かにするを得ざるを以て上記の如く假稱して置くが、これは右の「北遊日記第一」の終に「別小冊に記事、其外圖繪有」と記すものにして、多く備忘の爲の記録であり、北海道、奥羽等所々の風景等を寫しあるも極めて略筆のものである。

明治八年（四十歲）

吉野山花見（法量竪一六・二厘——五寸三分、幅九・八厘——三寸二分。和紙廿枚綴。厚紙表紙に「明治八年四月、鐵齋山人、吉野山花見」と記す。）

四月中旬奈良に赴き、奈良博覽會見物、同地に於いて邂逅せる山中靜逸、

江馬天江、神山鳳陽、岡本黃石等と共に吉野へ遊んだ記事である。明治初年に於ける鐵齋の交友關係を確め得るを以て貴重なる文獻である。公刊参照。

明治九年（四十一歳）

巡陵日誌（法量竪一二・二厘—四寸。幅一六・九厘—五寸二分五厘。和紙廿枚綴。表紙に「明治九年之部、巡陵日誌、石上少宮司富岡百鍊」とあり。）

此の年五月、鐵齋は大和國石上神社少宮司に任命せられ、六月同神社に赴任したのであるが、七月下旬より孝元、天武、持統、欽明、齊明、用明、孝安、孝昭等御歴代天皇を始め其他の御陵を參拜して此の記録を作つたのである。

註 鐵齋の記録中、別に「聖陵圖考纂」あり。大和地方所在御陵を精査しあり。これ恐らく、明治十年二月堺縣行幸の節、同縣よりの依頼によつて右縣下所在の御歴聖御陵位置の繪圖卷製作に當り、其の調査の際の記録なのであらう。美術研究第六十五號所載、富岡鐵齋公私事歴録參照。

南遊日記之一

（法量竪一三・五厘—四寸五分、幅二〇・五厘—六寸八分。和紙二十五枚綴。表紙に「明治九年丙子十一月、南遊日記之一、富岡百鍊」とあり。）

十一月十三日堺を出立、大和國上市に至り、同地より吉野川上流を遡り、丹生川上神社上社に詣り、神之谷村に南朝古蹟を弔ひ、更に北山川上流に出でて紀州に入り、熊野本宮に至り、十津川を遡つて再び大和國に入り、下市に至り、玉手山に日本武尊の御陵を探り、同月二十七日石上神社に歸つた記録である。

註 此の旅行、當時鐵齋は未だ石上神社在任中なるを以て同地より出發すべき筈なるに堺より出立せし理由は、當時大和國は堺縣所管に付、何等かの所用ありて縣廳所在地に至りしなるべく、記中所々の學校を調査せる記事見ゆれば、或は其等の用向を以て堺に至り、同地より此の旅行に出發せしなるべし。なほ此の記中、王台山、紀州本宮等は既に先年經過せし旨記載あり、これは何時の事なるか不明なるも、明治七年の北遊日記第一にも先年紀州那智瀧を見たる由の記事あり。大

富岡鐵齋の旅行記に就いて

阪の寶塚清荒神百鍊會所有「那智瀑布」圖に「昨冬登那智山」云々とあり、己巳の年紀あるを以て明治二年の作なること明かなるものあり、此の作品が若し信じ得べきものとするならば、鐵齋は明治元年に紀州に遊んだこととなる。或は此の時の事か。

明治十年（四十二歳）

紀州和歌縣下名草郡和田村彦五瀨命龜山御墓長慶天皇御陵圖（法量

四・五厘—八寸一分、幅一六・五厘—五寸四分。和紙十五枚綴。表紙に「明治十年丁丑五月、富岡百鍊誌、紀州和歌縣下名草郡和田村彦五瀨命龜山御墓長慶天皇御陵圖」とあり。）

五月二十二日出立、和歌山に至り、二十四日名草郡和田村龜山神社に彦五瀨命御墓參拜、高野山を經、二十六日伊都郡丹生川村に出で、同地所在の長慶天皇御陵參拜、南朝史蹟を探つた記録である。

註 當時鐵齋は大鳥神社大宮司の職に在りしを以て堺より出立せしなるべし。

明治二十二年（五十四歳）

今土佐記（法量竪二七・三厘—九寸、幅一九・五厘—六寸四分。和紙十二枚綴。表紙題箋に「明治廿二年二月、今土佐記、鐵齋」とあり。）

二月六日、土佐國土佐郡一宮村都佐（高鴨）神社參拜、七日、長岡郡國分村比江に土佐古國府址を探ね、十日、高知に至る。なほ同國幡多郡三崎村の名勝龍串にも遊びし如くなるも記事詳細を缺き不明。

東遊記事一（法量竪二七・三厘—九寸、幅一九・五厘—六寸四分。和紙十一枚綴。表紙に「鐵齋主記、東遊記事一」とあり。）

八月二日近江國坂田郡筑摩神社參拜、同月十一日三河國碧海郡大濱村石川三碧方に寓、同郡和泉村に石川丈山邸趾を探り、幡豆郡天竹村新波陀神社參拜、更に遠江國引佐郡井伊谷村に至り井伊谷宮參拜、南朝宗良親王墓廟を拜す。相州鎌倉に至り、金澤稱明寺を觀る。九月廿三日、下野國宇津宮に蒲生君平後裔蒲生又右衛門を訪ひ遺物を觀る。翌廿四日、日光參詣。廿六日、足利に至り足利學校參觀。此の旅行記、記事脈絡を缺き詳細不明。

明治二十八年（六十歲）

後のしのふ草（法量堅二三糎―七寸六分、幅一六・五糎―五寸四分。和紙卅六枚綴。絹表紙表に「後のしのふ草」裏に「平安桃花室巻、鐵槍齋手記」とあり。）

元來雜記帳であるが、中に明治二十八年六月伊賀上野に遊び、同地愛染院に芭蕉塚を訪ひ、同月十日、伊賀郡種生村國見山に兼好塚を弔ひし記事並に圖見ゆ。

註 美術研究第七十一號所載富岡鐵齋詩文集中「伊賀國見山弔兼好法師墓」と題する詩あり。なほ鐵齋先生名畫集所載、三重縣龜井曉氏所藏書幅参照。

明治三十一年（六十三歲）

錢更徒記 吉野郡（法量堅二五・二糎―八寸三分、幅一七・六糎―五寸八分。和紙廿六枚綴。表紙題箋に「錢更徒記。吉野郡」とあり。）

これも元來雜記帳なりしを旅行記に轉用せるもの。六月六日、大和國吉野郡上市の桶口喜兵衛の招請に應じ四條派畫家加藤英舟と^註同地に至り滯留數日、十二日吉野神宮參拜、賀名生に南朝行在所を尋ね、妹山大名持神社參拜、十八日水分神社、苔清水、金峰山神社等吉野舊蹟を訪ふ。

註 加藤英舟、明治六年生、幸野榎嶺門、現存。

天橋遊記（法量堅二五糎―八寸三分、幅一八・五糎―六寸一分。和紙二十七枚綴。表紙に「天橋遊記」と記す。）

遊丹所見 第二（法量右に同じ。表紙に「遊丹所見第二」と記す。）

九月五日京都發、福知山に至る。六日、丹後國加佐郡河守上村附近内宮村の内宮神社參拜。七日、同郡岡田下村大川神社參拜、由良を経て宮津に至る。以下數日同地に在り、天橋立の名勝を探り籠神社等參拜せるものの如し。十日、與謝郡加悦より大江山登山、鬼窟を探る。以下暫く加悦村に滞在せるものの如し（以上天橋遊記）。九月二十一日、加悦村發、岩瀧、宮津、府中、日置、里波見を経て與謝郡養老に至る。二十二日、同郡本庄村宇良神社參拜、竹野郡宇川村に至り穴文殊の奇勝を探り中濱に至る。二十三日、間人村を經、網野より峰山に至る。更に中郡五箇村比沼麻奈爲神社

に參詣せるものの如し（以上、遊丹所見第二）。^註

註 此の丹後旅行を明治三十四年の事と記せる傳記もあれど非なるべし。なほ「天橋遊記」「遊丹所見」とも年紀を缺くが、「天橋遊記」中に田崎草雲の訃報を記載しあるを以て明治三十一年と推斷せらる。

明治三十三年（六十五歲）

北遊漫筆（法量堅二四・七糎―八寸一分五厘、幅一七・二糎―五寸七分。表紙に「明治三十三年九月廿八日出立、北遊漫筆」とあり。）

九月二十八日發、大津に至る。二十九日、大津發、加賀國大聖寺に至り、山中温泉に赴く。十月一日、山中發、山代温泉に遊び、また那谷村那谷寺の風光を賞し、動橋驛より金澤に至る。同地兼六公園を觀、十月三日福井に至り同地西光寺に柴田勝家の墓を弔す。

明治三十六年（六十八歲）

東遊漫筆（法量堅二〇糎―六寸六分、幅二二・八糎―七寸五分。和紙、八十九丁綴。表紙に「明治卅六年十月、東遊漫筆」と記す。）

再信記事（法量堅二〇糎―六寸六分、幅一四糎―四寸六分。和紙十枚綴。表紙に「明治卅六年十月、再信記事」とあり。）

東遊記事（法量堅二四・四糎―八寸五厘、幅一七・二糎―五寸七分。和紙二十枚綴。表紙に「明治三十六年十月、東遊記事」と記す。）

更科觀月記事（法量堅二七・五糎―九寸一分、幅二〇・二糎―六寸六分八厘。和紙二十二枚綴。表紙に「明治卅六年十一月二日、舊曆九月十二日、更科觀月記事」と記す。）

東游記事 其二（法量堅二五・三糎―八寸三分五厘、幅一七・八糎―五寸九分。和紙二十枚綴。表紙に「明治卅六年十一月十二日發東京」題箋に「東遊」と記す。）

十月二日京都發、名古屋に至り同地眞福寺の古書籍を見る。四日、信州下伊那郡飯田に赴き、同地に同月二十六日まで滞在^註。其の間、同月十四日には同郡波合村に尹良親王御陵を弔し、同親王殉難紀念の碑の建碑式に參列した。^註また飯田の郊戸神社參拜、更に下川路村に天龍峽の勝景を探り、二十六日飯田發、上伊那郡赤穂村大御食神社參拜、同地に二日滞在、諏訪郡下諏訪に至り、諏訪湖に遊び、同郡東堀村に名醫長田德本の墓を弔し、

鹽尻を経て長野に向ふ（以上、東遊漫筆、東遊記事、再信記事）。

註一 大正十五年、飯田の河野邦治氏發行の單行本「富岡鐵齋」所載「鐵齋先生と飯田」に依れば、此の時鐵齋は名古屋より中央線中津に至り、同地より神御坂、園原を経て飯田に赴きしなり。

註二 鐵齋が始めて浪合に遊んで尹良親王舊蹟を探つたのは、東遊記事の記録に依れば明治九年となつてゐるが、前掲「鐵齋先生と飯田」には八年八月となつてゐる。何れが正しいか遽に斷定し難いが、八年説或は是ならんか。それは明治廿七年南宗畫誌第七號に鐵齋の寄せたる文章「畫史登獄」中に八年七月富士登山の旨を記してゐるが（美術研究第七十一號所載、富岡鐵齋詩文集參照）、或は此の時信州にも入りしならんかと想像せらるるからである。なほ明治六年五月に鐵齋は東京より木曾街道を経て京都に歸つたことがあるが（美術研究第六十五號所載、富岡鐵齋公私事歴録參照）、此の時には恐らく浪合には赴かざりしならんか。なほ後考を俟つ。因に云ふ、浪合の碑は尹良親王を悼み奉りて明治十三年華族西四辻公業の詠みし歌を鐵齋の唱道にて碑に鐫ることとなり、これが此の度完成せるに就き、鐵齋は同地有志の招請に依つて浪合を訪れたのである。此の碑の字は鐵齋の書になるものであるが、また別に園原住吉神社境内の園原碑の字も鐵齋の揮毫になるものである。前掲「鐵齋先生と飯田」參照。

十一月二日、長野善光寺參拜。同夜、城捨長樂寺に月を賞す。信越線に依り輕井澤、碓氷峠を経、妙義山に登り其の勝景を探り、東京に赴く（更科觀月記事^註）。

註 東京に於いては當時の大藏大臣曾禰荒助に招待せられ、其の官邸に滯留し、荒木寛畝、川端玉章、下條桂谷、今泉雄作等と相會したと傳へられてゐるが、東遊漫筆中に九鬼隆一の名刺また東遊記事に下條桂谷の母の歌貼込まれあり、是等有力なる美術關係者と相會したことを想像し得る。

十一月十二日、東京發、下總香取鹿島兩社參拜、潮來水郷を探つて水戸に赴く。十五日、大洗磯大洗神社參拜。十六日、常盤線に依り勿來に赴き、同地勿來關舊蹟を探り、仙臺に至る。同地孝勝寺に政岡（三澤初子）の墓を弔し、松島に赴かんとして途次、多賀城碑、野田玉川碑を觀て鹽竈に出

で、備に松島の名勝を探る。更に中尊寺に赴きしものの如くなるが、同月十九日、仙臺發、東北本線にて黒磯驛に至り、同地より那須郡湯津上村に至り、那須國碑を觀る。更に日光に至り、中禪寺湖、華嚴瀧等の名勝を探る。歸路は東海道に取り、途次三河國寶飯郡赤坂の長福寺に大江定基の古蹟を探りしものの如し（東遊漫筆、東遊記事其二）。

明治卅七年（六十九歲）

西遊記事（法量堅一四・三厘—四寸九分、幅三九・五厘—一尺三寸。唐紙十九枚綴。）
表紙に「明治卅七年天長節、鐵齋老人、西遊記事、遊寒霞溪」とあり。

十一月三日、小豆島寒霞溪に遊び其の勝景を寫せるもの。記事殆んどなし。以上、現在迄に調査し得たる限りに於いての資料を盡くしたが、なほ斷片的に諸多の記録中にも此處に發表し得たる以外の記事無しとは保し難く、且既に述べ置きたる如く之のみを以て鐵齋一代に於いて試みたる旅行の全體を盡くすとは云ふを得ぬが、然しなほ以上發表の分のみを以てしても鐵齋傳研究、殊に其の正確なる年譜編纂の上に重要な資料を提供し得たることを欣快とする。